

Title	中世末期口語における～テゴザルと～テゴザッタ : 中世語動詞のテンス-アスペクト体系の一斑
Author(s)	福田, 嘉一郎
Citation	詞林. 1992, 11, p. 61-76
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67320">https://doi.org/10.18910/67320</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 中世末期口語における～テゴザルと～テゴザッタ

—中世語動詞のテンス-アスペクト体系の一斑—

福田 嘉一郎

## 0 はじめに

本稿では、前稿<sup>註1</sup>に引き続き、中世語の動詞のテンス-アスペクト体系を論ずる一環として、中世末期口語（以下単に中世語とする）における動詞の尊敬／丁寧体である<sup>註2</sup>、連用形+テゴザルの形式（「上げてござる」「読うでござる」「習うでござる」等。以下～テゴザルとする）と連用形+テゴザッタの形式（「上げてござった」「読うでござった」「習うでござった」等。以下～テゴザッタとする）について考察し、その文法的意味を明らかにしたい。特にこれらの表現形式に限定してとりあげることが、中世語の動詞のテンス-アスペクトを体系的に記述する上でどのような意義をもっているかは、本稿の最後で述べるつもりである。

## 1 取り扱う資料と考察の対象

1. 1 まず本稿で取り扱う資料であるが、中世末期～近世初期の口語を反映するものとして、キリシタン資料から天草本平家物語（1592年刊）、天草本伊曾保物語（1593年刊）、コリヤード懺悔録（1632年刊）を、朝鮮資料から初本捷解新語（1676年刊）を、国内資料から大蔵虎明本狂言集<sup>註3</sup>（1642年写）を、それぞれ選んで調査することにした。また天草本平家物語は、その原拠本についての研究が進められてきている<sup>註4</sup>。本稿では天草本を原拠本と対比する場合、現在までの研究成果に基づいて、斯道文庫蔵百二十句本<sup>註5</sup>を以てし得る個所、すなわち天草本巻II第二章～巻III第八章（pp.107-196）および巻IV第二章以降（pp.228 ff.）から引用する。

1. 2 次に、本稿での考察の対象となる表現形式を規定しておく。第一に、ここでとりあげる～テゴザル・～テゴザッタは、元来の構成が動詞<sup>註6</sup>連用形+接続助詞テ+存在動詞（+タ）である形式に限られる。したがって、形態は連用形+テゴザル、テゴザッタであっても、その中のゴザルが行ク／来ルの尊敬語と認められるときは、考察の対象としない。例えば次のような場合である。

(1) このほどは屋島へござるとこそ承ったに、荷としてこれまでつたへて  
ござったぞ? (天草本平家、p.310)

(2) ~~(後家)~~「お新発意たちは、連立つてござらぬか (住持)「いや今  
夜は、檀那衆のお出でぞ、客がおじやれども、みどもはまいつた、それ  
で誰も連れてまいらぬ (虎明本狂言、寝替、下 p.218)

例(1)は原拠本の、

(3) 此ノ程ハ・屋島ニ渡ラセ玉フトコソ・承テ候ヒツルニ・何トシテ・是  
マテ伝リ玉ヒテ候ヤラン (斯道文庫本平家、p.598)

に対応するものであり(移動する意の伝ハルと、伝え聞く意の下二段伝フとの取  
り違えであろう)、また例(2)では後家の問いに対して住持が「連れてまいらぬ」  
と答えており、いずれのゴザルも来ルの尊敬語であることがわかる。

第二に、本稿では文末の～テゴザルと～テゴザッタ、例えば、

(4) 次にまた刀の儀はやがて身内にあづけおいてござる (天草本平家、p.  
9)

(5) 上は鞘巻の黒う塗ったに中は木刀に銀箔をおいてさされてござった。  
(同、p.9)

のようなもののみをとりあげることとし、従属節をつくる、

(6) 私が相伝の主殿忠盛をこよひおのおの聞討ちに召されうとあることを  
伝へ聞いてござるほどに (天草本平家、p.5)

(7) さうあつて忠盛は御前で舞はれてござったれば (同、p.5)

などの例は除外した。中世語における～テゴザルと～テゴザッタの文法的意味は、  
テンスの問題に深く関わっていると筆者は予想するのであるが、現代語において  
従属節の述語は、ときに文の述語の場合と異なったテンスの形式をとる(いわゆる  
相対的テンス)<sup>27</sup>。このような現象は中世語にも共通していた可能性があり、  
もしそうであったとすると、～テゴザルと～テゴザッタについても、(中世語の  
従属節一般を何種類かに分類してそれぞれの文法的特徴を吟味することなく)従  
属節をつくる場合を文末の場合と同様に考えるならば、混乱に陥る結果となる。  
こうした危惧から、考察の対象を一応文の述語に限定しておく方が無難と判断し  
たのである<sup>28</sup>。

ただし、トがうける引用節の中の言い切る述語は、文の述語に準ずるものと見  
なす。日本語の引用節には、節中の述語自体の形式による直接話法と間接話法の  
区別がないからである。つまり、引用節中の指示語などから、直接話法と解釈さ  
れるときは勿論のこと、たとえ間接話法と解釈されるときでも、節中の言い切り

の述語がテンスに関してとる形式は文の述語の場合と同じであり、ただその基準時点が主文の発話時ではなくて、常に引用節の発話時なのである<sup>29</sup>。もつともこれも現代語についていえることであるが、古くは引用節中の述語が、文の述語の場合とは形式を異にしたという事実は聞かないので、上のような措置をとっても許されると思う。

## 2 天草本平家物語に見られる～テゴザルと～テゴザツタ

2. 0 本稿では、中世語における～テゴザルと～テゴザツタの意味を明らかにするのであるが、～テゴザツタの用例は数が少なく、天草本平家物語以外の資料からは、天草本伊曾保物語の1例、コリヤード懺悔録の2例、初本捷解新語の1例、虎明本狂言集の1例の、計5例を得る程度である。そこで、～テゴザツタがまとまって見られる天草本平家物語を中心に考えてゆくことにする。他の資料の～テゴザル・～テゴザツタについては、第3章であわせて考察したい。

2. 1 天草本平家物語を国語史の資料として取り扱うにあたっては、原拠本の表現からの影響に注意しなければならない。不干ハビヤンによる天草本の序文に「この物語を力の及ぶところは本書〔原拠本〕のこばをたがへず書写し」とあるごとく、その口語訳に際しては原拠本にできるだけ忠実であろうとした態度がうかがえるといわれており<sup>30</sup>、～テゴザルと～テゴザツタの使い分けについても、原拠本の何らかの表現をなぞった結果なのではないかということが、まず問題になってくる。しかし、次の(8)～(11)のような対応例を見るかぎり、そうした観点からは説明できない現象である。

(8)a. 義経・殊ニ憤リ申レケレハ・サラハトテ・ツイニ・渡サレ・獄門ニソ懸ラレケル・見ル人・河原ニ市ヲ成ス (斯道文庫本、p.566)

b. 義経ことに怒り申されたれば、さらばとあつてつひに渡された：見る人河原に市をないてござる。(天草本、p.286)

(9)a. 七八十・八九十ノ者共モ・世ノ滅スルナント云事ハ・有声ニ・昨日今日トハ思ハサリツル物ヲ・コハイカニセントテ・叫喚フ・是ヲ聞テ・少キ者共モ・泣悲ム (斯道文庫本、p.725)

b. 七八十、八九十の者どもも世の滅びうずるなどといふことは、さすがきのふけふとは思はなんだものを：こは荷とせうぞとをめき叫べば、これを聞いて若い者も泣き悲しうでござった。(天草本、p.367)

(10)a. 今度・三井寺ニ寄セタランズルニ・余ハシラス・相構テ・先・競鷹・生捕ニセヨ・鋸ニテ・頸キラントソ宣ヒケル (斯道文庫本、p.263)

- b. 今度三井寺に寄せうずるに、余は知らず、かまへてまづ競めをば生け捕りにせい、鋸で首を引かうと言はれてござる。(天草本、p.120)
- (11)a. 去程ニ・平家ハ・正月中旬之比・讃岐屋島ヨリ・摂津国難波瀨ヘソ伝玉フ・東ハ・生田森ヲ・大手ノ城戸口ト定メ・西ハ・一谷ヲ・城廓トソ構ヘケル(斯道文庫本、p.504)
- b. 平家は正月中旬のころ讃岐の屋島から津の国の難波へ伝うて、ひがしは生田の森を大手の木戸口と定め；西は一の谷を城廓にこしらへられてござった。(天草本、p.252)

(8)a.、(9)a.はいずれも原拠本の動詞の終止形であるが、(8)b.では天草本の～テゴザルが(8)a.に対応している一方で、(9)b.では～テゴザッタが(9)a.に対応している。また(10)a.、(11)a.はいずれも原拠本の動詞連用形+ケリであるが、(10)b.では天草本の～テゴザルが(10)a.に対応している一方で、(11)b.では～テゴザッタが(11)a.に対応している。これらの例から、天草本平家物語に見られる～テゴザルと～テゴザッタは、ハビヤンが原拠本の表現にそれほど拘泥せず、比較的自由に口語訳した中で用いられた形式であると考えられる。

2. 2 天草本平家物語は、序文に「この平家をば善物のごとくにせず、兩人相對して雜談をなすがごとく、ことばのてにはを書写せよ」という「師の命に従つた」とあり、右馬之允・喜一檢校なる二人の人物による問答体をとっている。そのため本文は、右馬之允の台詞と喜一檢校の原拠本をうけた語りとに大きく分かれ、後者がさらに原拠本の地の文に相当する個所、すなわち語りの地の文と、原拠本の会話文(心話、書簡を含む)に相当する個所、すなわち語りの中の会話文(物語の登場人物の台詞)とからなるという二重構造をもつ<sup>24</sup>。例えば、

- (12)a. 去程ニ・高倉院ノ御謀叛ノ由披露仕ル・法皇ハ是ヲ聞召シ・「由シナキ都ニ出テ・カク憂キコトヲ聞召ヨ」トテ・又御涙ニ咽セラワシマス・大政入道・福原ノ別業ニヲワシマシケルニ・前右大将宗盛・脚力ヲ立テ・申レタリケレハ・大政入道・大キニ嘖テ・「別ノ子細アルマシ・宮ヲ・急キ・奉<sup>リ</sup>擷取・土佐ノ畑ヘ・流マイラスヘシ」トソ宣ケル……出羽判官源大夫判官ニ・此由ヲ仰付ラル……

(斯道文庫本、pp.248ff.)

- b. VM.「高倉の宮の御謀叛の様体をも聞きたい、お語りあれ。」  
 Q I.「まづはさて遺留も召されぬお人ぢや。さらば語りませう  
 : 高倉の宮の御謀叛の由を披露つかまつたれば、法皇はこれを聞か

せられ、『よしない都へ出て、またこのやうなうとましいことを聞く』とおほせられて、おん涙にむせばせられた。清盛は箱原の別業（はこはらの べつごう）にあられたに、次男宗もりの芳（よし）から飛脚（ひやく）をたててこの由を言（い）ひ送られたれば、清・大きに腹をたてて、『別の子細（べつの子さい）もない：いそいで宮を擧め捕りまらして、土佐の姫（とさのひめ）へ流（なが）しまらせい』と言うて、出羽の鞆（とね）官と、源太夫判官にこの由を言（い）ひつけられた。……」

（天草本、pp.107ff.）

（「 」、『 』は筆者）

の場合、天草本の『 』の外が語りの地の文に、『……』が語りの中の会話文にあたる。ただし右馬之允（VM.）の台詞と、喜一檢校（QI.）の台詞で「語りまらせう」までの部分とは、原撰本と無関係な両人物の雑談である。

さて、これらのどの個所に～テゴザル・～テゴザツタが現れるかを調査すると、次のようなことが知られる。すなわち、天草本に～テゴザツタは全部で38例見られるが、それらは原則として語りの地の文にしか現れず、語りの中の会話文に現れる～テゴザツタは、

- (13) いつぞやまた召されさせられて今様を歌はせられたにも思ひ知られてこそござつたれ。（p.105、仏御前→姦王）

の1例のみであるのに対して、天草本に137例見られる～テゴザルは、語りの地の文にも（65例）、語りの中の会話文にも（67例）、原撰本と無関係な雑談にも（5例）<sup>註22</sup>現れるのである。

まず～テゴザツタについて考察する。天草本における語りの地の文で述べられていることは、いうまでもなく「平家の物語」であり、それは右馬之允と喜一檢校にとって、自分たちが生きている現在の世界とは直接関わりのない、遠い昔のhistoriaである。殆どそうした個所にしか現れない～テゴザツタは、話し手と聞き手の構成する発話場面と直接関係のない過去の出来事を語る場合にしか、用いられないものなのではなかろうか。以下は、現在と断絶した過去の時を示す副詞句と共起した例であるが、このような～テゴザツタが現在から切り離された過去の事態を示していることはより明白である。

- (14) 嘉応元年のことでござつたに：一院は御出家なされてござつた（p.13）
- (15) ある時法皇も御幸なされたれば、淨憲法印といふ人もお供せられてござつた。（p.19）
- (16) 十月の十三日には平家は駿河の国の清見が関へつかれてござつた（p.

- (17) そのころある夜夜半ばかりに六波羅のあたりが大地もうち返いたやうに騒いで、馬に鞍を置き、腹帯をしめ、具足をき、東西に走りち騒うて ござった。(p.177)

さきの例(11)b.もこれに加えられるであろう(「正月中旬のころ」)。このような観点で見ると、さきに語りの地の文に現れない例外とした(13)も、「いつぞやまたあなたがお召しを受けて、今様をおうたいになった時にも」という、現在と断絶した過去の時を示す副詞句をともなっていた。例(13)の～テゴザツは、語りの中の会話文で用いられているけれども、仏御前が個人的な回想を表白するものであって(聞き手は妓王)、会話文の発話場面(仏御前と妓王とが構成する)とはやはり直接関係のない、会話文の発話時から見た過去の事態を示しているのである。

次に～テゴザルについてであるが、前述のように天草本の～テゴザルは、語りの地の文でも語りの中の会話文でも用いられている。それらのうち、語りの地の文に現れるものは、～テゴザツと同様過去の事態を示していると考えられ、現在と断絶した過去の時を示す副詞句と共に起した、以下のような例も存在する。

- (18) それによって中ごろ権の師と申す人あまり色が黒くろござったによって、見る者ども黒くろ師と異名をつけてござる。(p.6)
- (19) 都をば七月しちがつの下旬に出たれども、九月くわがつの二十日ごろにやうやうと鬼界が島にはついてござる。(p.73)
- (20) まづその木曾殿はそのころ信濃の国におぢやつてござる。(p.156)
- (21) その時みな色をそつとなほいて、頼もしう思はれてござる。(p.194)

語りの地の文に現れる～テゴザル(2. 3で述べる「～ときこえ(まらし)てござる」24例を除く41例)と～テゴザツ(37例)とは、互いに置換可能であるように見える<sup>22</sup>。では、天草本に見られる～テゴザルがすべて～テゴザツに置き換えられるかということ、これには疑いがもたれる。そのように考えたのでは、～テゴザツの現れ方が充分に説明できないことになる。さきに見たとおり、語りの中の会話文では～テゴザツが殆ど用いられていない。もし天草本の～テゴザルと～テゴザツとが常にヴァリエーションの関係にあるのなら、語りの中の会話文における両者の比率が67対1ということにはならないはずである。

ここで天草本に見られる、次のような～テゴザルの例に注意したい。

- (22) やがて消えいられたを膝の上にかき伏せ奉り、有王が参つてござる：多くの波路をしのいでこれまでたづね参ったかひもなう、やがて憂き目

を見せさせらるるかど、泣く泣く申したれば (p.86、有王→俊寛)

(23) 競が申したは：宮また三位入道殿も三井寺にと承つてござる：さだめ

て今は討手をむかへられうずれば、三井寺法師をはじめてよからうずる者をえり討ちにいたさうず：さりながら乗つてことにあはうずる馬を親しい奴ばらに盗まれてござる。お馬を一匹あづけくされうずるかど、申したれば (p.118、競→宗盛)

(24) 平家の芳に先陣をした忠清が大将に申したは：橋の上の軍は火の出るほどになつてござる……今は川を渡らうずるでござるが……渡すほどならば、馬、人押し流されて失せませうず。淀一口へ向ひませうか？

河内路へまはりませうかど、申したれば (p.129、忠清→知盛)

(25) 武蔵の国の住人猪俣と申す者ぢや：助けさせられい、平家すでに負け

軍とこそ見えてござれ：もし源氏の世になつたらば、御辺の一家親しい人々何十人もあれ、それがしが勲功の賞に申しかへて奉らうと申したれば (p.274、猪俣→盛俊)

これらはいずれも語りの中の会話文で用いられていて、語りの地の文に現れるさきの例(18)～(21)などとは異なり、現在から切り離された過去の事態を示しているのではない。(22)～(25)の場合、～テゴザルは客観的には以前に属する、しかし発話場面に直接関わる出来事を持ち出すことによって、むしろ話し手と聞き手の構成する発話場面を解説しているのである。このように天草本の～テゴザルのなかには、語りの中の会話文に現れ、現在に結びつけられた以前の動きを示すものが存在する。それらが過去の事態を示す形式とどれほど違っているかは、上の(24)、(25)を天草本に見られる、それぞれ同じ成ル、見ユという動詞の連用形+テゴザッタの例である次の(26)、(27)と比較するとき、端的に浮かび上がってくる。

(26) 馬には人、人には馬が落ち重なつて、さしも深かつた谷一つを平家の人数七万余りをもって埋めあげましたれば、血は川のごとくに流れ、屍は丘のごとくになつてござつた。(p.168)

(27) 法皇の御所になつた寺には家のうちにはみな人があまつて、庭から門外までびつと満ち満ちてあところ、比叡の山の繁昌門跡の面目と見えてござつた。(p.197)

(24)、(25)の～テゴザルは、発話時から見て確かに以前に属する出来事、すなわち橋の上の戦闘が激しくなつたこと、あるいは平家の負けがわかつたことをも



ち出しているけれども、問題になっているのはそうした出来事そのものではなくて、出来事があった後の発話時の状況である。なぜならもち出された出来事は、（橋が渡れないので）忠清が知盛に対策を進言するとか、猪俣が（敗色濃厚な平家の）盛俊に助命の交換条件を出すとかいった発話場面に直接関わっているからである。これに対して例(26)、(27)は、語りの地の文で用いられており、話し手は喜一検校、聞き手は右馬之允であって、～テゴザツタが示すところの、倶利伽藍谷に死体の丘が築かれたことも、比叡山の群衆が延暦寺の繁栄、天台座主の面目のように見えたことも、両人物にとっては現在の自分たちと直接関係のない、興味深い昔のエピソードにすぎないわけである。

筆者は、天草本の～テゴザルには、例(18)～(21)のように過去の事態を示す用法と、例(22)～(25)のように現在に結びつけられた以前の動きを示す用法とがあり、語りの中の会話文では後者の場合が多く、しかもそのときは前者の場合と異なって、～テゴザツタに置き換えられなかったのではないかと考える。これは、語りの中の会話文に現れる～テゴザルが、どれも～テゴザツタに置き換えられないということではない。語りの中の会話文でも、(13)の1例のみとはいえ～テゴザツタが用いられていたし、また天草本の、

(28) なかなかこなたのお文を御覧ぜられてこそ、いとどおん思ひはまさら  
せられてござる。硯も、紙もござないによって、お返事にも及ばれず：  
ただ心ばかりで果てさせられてござる。(p.92、有王→俊寛)

のような～テゴザルは、語りの中の会話文に現れるけれども、過去の事態を示す形式の～テゴザツタに置き換えられそうである（過去の出来事の一方的報告）。しかし、語りの地の文では～テゴザルと～テゴザツタとが同じ程度に用いられている一方で、語りの中の会話文では～テゴザツタが殆ど用いられていないという事実を説明するためには、やはり上のように考えるのが最も妥当であると思う。

以上の考察に従って、現在から切り離された過去の事態を示す意味を〈過去〉、現在に結びつけられた以前の動きを示す意味を〈完了〉と呼ぶことにする。

2.3 しかし、天草本平家物語の～テゴザルに〈完了〉を表す用法があったとする上の結論は、主として同資料に見られる例の解釈から導かれたものであった。そのような意味が〈過去〉を表すのとは違くとハビヤンに意識されていたということは、その場合の～テゴザルが～テゴザツタに置き換えられないという形式的特徴によってはじめてわかるのである。この特徴は同資料での～テゴザルと～テゴザツタの現れ方から間接的にうかがわれたが、それだけでは証拠としてやや弱い印象を否めない。〈完了〉を表す、～テゴザツタに置き換えられない～テゴザルがあったことを、より直接的に示す事実は見つからないであろうか。

実は、それに関わるのが2。2で少しふれた、「～ときこえ(まらし)てござる」という形式なのである。すでに明らかにされていたことであるが<sup>224</sup>、この形式は「～と申す」「～ときこえ(まらし)た」とともに、語りの地の文に現れるけれども、その大半が対応する表現を原拠本にもたず、単に「兩人相對して雜談をなすがごと」き体裁をとるために用いられたものであって、出来事を述べる語りからは浮き上がっている。

(29)a. 猪俣近平六範綱・平家方ニ聞ユル・越中前司ヲハ・此ウコソ討ト・高ラカニ名乗テ・其ノ日ノ・高名ノ・一ノ筆ニソ・付ニケル(斯道文庫本、p.540)

b. 平家<sup>芳</sup>にきこゆる越中の前司をば猪俣かうこそ討てと、高らかに名のつて、その日の高名の一の筆につけられたと、申す。(天草本、p.275)

(30)a. サレトモ痛手ナラネハ・頭ヲ裏ミ・弓打切テ杖ニツイテ・南都ノ方ヘソ落行キケル(斯道文庫本、p.278)

b. されども痛手でなかったれば、あたまをひつつつんで、弓を打ち切つて杖について、南都の<sup>芳</sup>へ落ちゆいたと、きこえまらした。(天草本、p.128)

(31)a. 此ノ声々ノ・耳ノ底ニ留ツテ・西海ノ旅ノ<sup>響</sup>及モ・吹風ノ音ヘ・立波ノ音ヘニ付テモ・只今聞様ニコソ・思ハレケレ(斯道文庫本、p.461)

b. この声どもが耳の底にとまって、<sup>響</sup>西海の旅の空までも吹く風の声、たつ波の音につけても、ただ今聞くやうに思はれたと、きこえてござる。(天草本、p.187)

そして、少数ながら対応する例の、原拠本での表現は諸形式の間に共通である。

(32)a. 上人是ヲ幡ニ縫ヒ・長楽寺ノ正面ニ・掛ラレケルトソ承ル(斯道文庫本、p.677)

b. 上人これを<sup>幡</sup>にぬうて長楽寺の正面にかけられたと申す。(天草本、p.353)

(33)a. 申スマテモ無ク・馳テ賜ツテンケレハ・六条河原ニテ斬ニケリ・カクテ維榮・甲斐々々敷・頼レケルトカヤ(斯道文庫本、p.742)

b. 申すまでもなうやがて賜はつたれば、六条河原<sup>カヤ</sup>で切つて、緒方はかひがひしう頼まれたと申す。(天草本、p.379)

(34)a. 折節灯サへ消テ・牙ニ質ヲ相見ルコト無シテ・泣々別レケルトソ承  
ル (斯道文庫本、p.590)

b. をりふしともしびさへ消えて、たがひに姿を相見らるることもなう  
て、泣く泣く別れられたときこえた。(天草本、p.303)

(35)a. 有声ニ・ワタクシニハ・<sup>得</sup>思ヒ立スシテ・宮ヲス、メ進セタリケル  
トカヤ (斯道文庫本、p.258)

b. なましひに私にはえ<sup>企</sup>てられず、宮をすすめ参らせられたときこえ  
た。(天草本、p.117)

(36)a. 黒田ガ弓筈ヲ・<sup>巖</sup>ノ道ニネヂ立テ・<sup>掻</sup>キ上リツ、・二人ヲモ引上ケ  
テ・助タリケルトカヤ (斯道文庫本、p.283)

b. 黒田が弓の<sup>筈</sup>を岩のはざまにねちたてて、かきのほつて二人をも引  
き上げて助けたと、きこえてござる。(天草本、p.131)

上の天草本の諸形式は、互いにほぼ等価な表現であると認められ、物語に対する話し手(喜一検校)の伝聞の立場を表す。「～ときこえ(まらし)た」「～ときこえ(まらし)てござる」と、動詞の現在形の「～と申す」とが置換可能であるということは、前者の「時制」が「現在」である(現在の事態が問題になっている)ということを示している。したがってそれらの形式は、「～と聞こえました」ではなくて、「～と(世に)聞こえています」とでも解釈すべきものなのである。

天草本平家物語には、「～ときこえ(まらし)てござる」は24例見られるが、「～ときこえ(まらし)てござった」は1例も存在しない。これを偶然でないとするならば、「～ときこえ(まらし)てござる」は〈完了〉(この場合は平家物語が世に広まった意)を表す、～テゴザツタに置き換えられない～テゴザルの実例であるということになる。

### 3 他の資料の～テゴザル・～テゴザツタ

3.0 2.2で記述した天草本平家物語の～テゴザルと～テゴザツタの文法的意味は、その他の中世語資料に見られる～テゴザル・～テゴザツタにもあてはまるようである。本章ではこのことについて述べてゆく。

3.1 まず～テゴザツタの用例を検討しよう。天草本平家物語以外の資料から得られるものは、2.0でもふれたように、次の5例である。

(37) シヤント言はるるは、「さてそれを受け取つてから何ともそれは言は  
なんだか」と問はるれば、「<sup>筈</sup>をも申す事はござなかつたれども、心の

申には一段と深い御大切の程を喜ぶ体が見えてござつた」と申した。

(天草本伊曾保、p.421、イソボ→シヤント)

- (38) また、ある時、人の内の者が物を売りに糸が所へ葉れば、盗うだ物と存じながら、その儘は浅う言われたによって、すなわち買いまらしてござつた。二匁ばかりの物でござつた。(懺悔録、p.46、信徒→神父)
- (39) また、させらぬ地盤に踏み懸って、大事なる人のことについて邪推の心が起って、定めてその分であろうとも存じ、人にも申し入れまらして、その人も我と同心せられてござつた。(同、p.50、信徒→神父)
- (40) (主)先度より聞けば、気相氣と聞いて、氣遣い思いまるしたが、何処を痛ましらるたか。顔を見れば今にも気相氣の色が御座る程に、構えて御養生さしられ。(客)忘れまるして御座つた。病中に珍らしい菓をちやうに下されて、御蔭に食ひまるして、其れより痛みまるした胸と腹が些と止みまるして、次第に直る様に御座れども、本には好う御座らん程に、今にも氣遣いまるする。(捷解新語、三三)
- (41) (大名)「それに付て今思ひ出いた、もり山は蚊の名所にて、昔もかの精がすまふをとつたなど、おさなひ<sup>モ</sup>の昔物語に云程に、もし蚊精では有まひか (太郎冠者)「仰らるればさやうでござる、森山には今におひて、人ほどな蚊ゞ有と申、殊にさいぜん見まらしたが、口が長ふなつてござつた(虎明本狂言、蚊相撲、上 p.199)

これらを見ると、例(38)を除いて(自らの犯した罪を現在から切り離して述べたとするのは疑問)、いずれも話し手の個人的回想の表白、聞き手に対する過去の出来事の一方的報告といった性格をもっている。回想性の点では、さきの天草本平家物語の例(13)とも共通しており、また例(40)、(41)には、「現在はその結果が残っていない」という含みさえあるように感じられる。すなわち、(40)では船酔いの菓の礼を述べなければならないことを一旦忘れたが、現在は相手に言われて気づいたのであり、(41)では大名と蚊の精とが相撲を取っていた時に蚊の精の口が長くなったけれども、現在は元に戻っていて見た目にはわからないわけである。

以上のようなことから、他の資料の～テゴザツタも、おおむね天草本平家物語に見られる～テゴザツタと同様、〈過去〉を表す形式であるといえよう。

3. 2 次に～テゴザルを見ることにすると、天草本平家物語以外の用例のなかにも、やはり〈過去〉を表わしているとはいいがたい、

- (42) 又その奥な石に五つの文字が有つたをイソボが見て言ふは、「所詮こ

の黄金をばシヤントも取らせられな、その故はここに又石に五字書いて  
ござる……」と言うたところで（天草本伊曾保、p.420、イソボ→シヤ  
ント）

- (43) 〈下六〉「もの申（鳥帽子）」「たそ（下六）」「先度あつらへた、  
系ほしはいできてござるか（鳥帽子）」「中々いできてござる、今少  
うるしが干ぬに依て、此ことくにいたひて置て御ざる、もつてかへらせ  
らるゝ間に、はやひまらせう（虎明本狂言、麻生、上 p.157）

などの、〈完了〉を表わしていると解釈されそうなものが存在する。さらに、以  
下の外国資料の例では、対訳ラテン語、朝鮮語が現在形になっている<sup>25</sup>。

- (44)a. なかなか、多分デウスのお事をば知りまらしてござる。（懺悔録、  
p.6、信徒→神父）

b. *Ita est profecto: magna ex parte hac notitia calleo.*（同、p.  
7）

- (45)a. そうあるならば、真にデウスをばらざる儀をばめされたと見えてござ  
る。（同、p.10、神父→信徒）

b. *Si res ita se habent: videtur Deusrem impertinentem fecisse*  
（同、p.11）

- (46)a. ただその浅い科に当る過怠は、有に無に、この世界にかブルガトリヨ  
にか、勤めいで叶わぬと心得まらしてござる。（同、p.14、信徒→神  
父）

b. *sed poena quae correspondet huiusmodi culpae veniali est ne-  
cessarium persolvere vel in hac vita vel in purgatorio. hoc  
est quod quantum ad hoc intelligo.*（同、p.15）

- (47)a. さりながら、その公事の相手のせられた損は、二・三十目ほどと覺  
えてござる。（同、p.26、信徒→神父）

b. *litis autem materia erat triginta argenteorum quos perdi dit  
ille cum quo habita est lis secundum quod modo recordor.*（同、  
p.27）

- (48) (客)然うあるに、長老の寺に朝鮮の御牌を置いて、常々節句の日毎に  
拜礼を為まるする。(主)然う召さるを島中行き通いに見て、人毎に語る  
を聞いて、朝廷もいかう感じさしられてこそ御座れ。（下線部対訳朝鮮  
語 'ir-k'v-rv-si-ne-ni-'i-ta）（捷解新語、三16）

- (49) [客]仰しらる所を今朝奉行衆へ談合したれば、御進物も御城へ上らしらる日、先へ持たせて並べ立てた後に、信使が御座る様<sub>ニ</sub>に為たらば好そうなど申す程に、其の分判事案にも申してこそ御座る。(主)然うあらば、ともかくも仰しらる次第に為まるせう。(下線部対訳朝鮮語 ni-re-nvii- 'i-ta) (同、七20ウ)

これらも、～テゴザルに〈完了〉を表す用法があったととらえることによって、合理的に説明されよう。つまり、日本語としては以前の動きをもち出す形式であるが、問題になっているのは現在の事態であるという意味を写すために、外国人が現在形の対訳語をあてたと考えたいのである。

3. 3 天草本平家物語の～テゴザルと～テゴザツタの文法的意味はまた、他の資料に～テゴザツタがあまり見られないこと<sub>の</sub>理由をも暗示している。神父に対して罪の赦しを乞う告解の記録や、日本との交易に必要な会話の教科書や、典型的な対話劇である狂言の台本に、現在から切り離された過去の事態を示す形式が現れにくいのはむしろ当然である。そのような資料に見られる～テゴザルは、大多数が～テゴザツタに置き換えられない、〈完了〉を表すもののではないかと思われる。～テゴザツタが用いられやすいのはやはり物語であって<sup>2216</sup>、さきの例(37)、(39)～(41)のように、それをあえて通常の対話の中で用いたときには、回想性や今に結果が残っていないといった含みが出てくるのであろう。

#### 4 おわりに

現代日本語における文末の動詞の過去形(～タ)に、本稿で言うところの〈過去〉と〈完了〉の意味があることはすでによく知られており、最近では前者を〈定過去〉、後者を〈現在パーフェクト〉と呼ぶテンス-アスペクト研究も見られる<sup>2217</sup>。この両者が区別される客観的な証拠は結局、問答で答が否定の場合にあるときは～(シ)ナカッタとなり、あるときは～(シ)テイナイ／(シ)ナイとなるという事実である<sup>2218</sup>。

(50)a. き<sub>の</sub>う昼飯を食べたか〈過去〉。いや、食べなかつた。

b. もう昼飯を食べたか〈完了〉。いや、(まだ) 食べていない／食べない。

一方中世語の～タにも、〈過去〉と〈完了〉の二つの意味があったと解釈の上から推定される。

- (51) さんざんにし散らいて、喜びの関をつくって、六波羅へ帰つたれば：  
清盛これを聞いて、ようこそしたれ〔完了〕と、ほめられた〔過去〕。  
(天草本平家、p.17)

しかし、もともと～タではなくて～テゴザッタとなっていれば、〈過去〉であるが一義的に決定される（～テゴザルとなっているときは、依然として二義的である）。すなわち、尊敬／丁寧体の場合には、〈過去〉と〈完了〉の区別が半ば顕在化するわけである。

注1 拙稿「ロドリゲス日本大文典の不完全過去について」（『詞林』9、1991・4）。なお、本研究は筆者の平成元年京都大学大学院文学研究科修士論文に基づいている。

注2 本稿でとりあげる～テゴザル・～テゴザッタには、尊敬体の場合と丁寧体の場合とがあるけれども、その相違は論旨に影響を与えないので、特に区別しなかった。

注3 池田廣司・北原保雄『森田狂言集の研究 本文篇』上中下（1972—83）に拠る。

注4 清瀬良一「天草版平家物語の原拠覚書」（『国文学攷』33、1964・3）など。

注5 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『百二十句本 平家物語』（1970）に拠る。

注6 「動詞未然形＋助動詞ルル・ラルル、スル・サスル」を含む。

注7 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味II』（1984）pp.184-216。

注8 ただし文末の～テゴザルであっても、次の2例は命令形なので考察の対象としない。命令文の述語は、いわゆる平叙文や疑問文の述語とは異なって、テンスをもたないと考えられるからである。

① 先づ御辺伸び上つて前足を井の欄に投げ掛け、頭をも前へ傾けてござれ（天草本伊曾保、p.490）

② 一人も残らず申し受けたいと申す程に、然う心得なされてこそ御座れ。（下線部対訳朝鮮語 'a-re-syo-sya）（捷解新語、六22）

例②では対訳朝鮮語が 'ar-ta「知る」の命令形になっている。初本捷解新語の対訳朝鮮語の解釈は、主として辻星児「原刊「捷解新語」の朝鮮語について」（『国語国文』44—2、1975・2）に拠った。

注9 注7 寺村1984、pp.187-189。

注10 鈴木博「天草本平家物語小考——特に百二十句本平家物語との対比を通して——」（『国語国文』43—9、1974・9）。

注11 安田章「コソの拘束力」（『国語国文』49—1、1980・1）。

注12 原拠本と無関係な雑談に現れる～テゴザルは、5例とも、

③ V.M.とてものことに平家に対しておこされた謀叛の起りをまちっ  
とお語りあれ。Q I.かしこまつてござる (p.13)

④ 右馬の<sup>ひょう</sup>允して重盛はこのことについて清盛へ異見をば召されなん  
だか? Q I.なかなか教訓を召されてござる。その<sup>様</sup>体をも語りま  
らせう。(p.30)

のように喜一検校の台詞であるが、③などは〈完了〉を、④などは〈過去〉  
を表わしていると解釈される。

注13 この事実は、～テゴザルと～テゴザッタとが形態上は現在形と過去形の対  
立でありながら、意味の面ではそのようにとらえられないことを示している。  
語りの地の文に現れる～テゴザルと～テゴザッタについても、形式が異なる  
以上、意味に何らかの違いがあった可能性は十分に考えられる。しかし、例  
(14)～(17)のような～テゴザッタと、例(18)～(21)のような～テゴザルとが  
どう違うのか、客観的な証拠を挙げて説明することは、今のところ不可能で  
ある。もし両者の間に違いがあるとすれば、それはもはやテンスやアスペク  
トの問題ではないと思われる。また、語りの地の文で用いられている～テゴ  
ザルはいわゆる歴史的現在ではないかという疑いもあるけれども、41例中38  
例までがピリオドをともなっているところから見て、その可能性は低い(注  
14安田1981参照)。

注14 安田章「「語り」の表現機構——中世の場合——」(『表現研究』34、19  
81・9)。

注15 例(44)b.の *calleo*「知る」と(46)b.の *intelligo*「認識する」は能動相  
の、(45)b.の *videtur* (<*video*「見る」)は受動相の、(47)b.の *recorder*  
「思い出す」は形式受動相の、いずれも直説法現在形。例(48)の *'ir-k'v-*  
*rv-si-nv-ni-'i-ta* (<*'ir-k'vt-ta*「ほめたたえる」)、(49)の *ni-rv-*  
*nv-iq-'i-ta* (<*ni-rv-ta*「言う」)を現在形と見ることについては、注8辻  
1975参照。

注16 天草本伊曾保物語には相当数の～テゴザッタが見られるはずなのに、会話  
文に現れる(37)の1例のみであるのはなぜかという疑問が残る。これは、～  
テゴザル・～テゴザッタが当時としてきわめて鄭重な言い方であり(ジョア  
ン・ロドリゲス原著、土井忠生訳註『日本大文典』1955、p.597)、天草本  
伊曾保物語の地の文が、天草本平家物語における語りの地の文ほど鄭重な文  
体をとっていないからである(伊曾保の9例の～テゴザルも、すべて会話文  
に現れる)。この、きわめて鄭重な文体による物語という天草本平家物語の



特徴が、「兩人相對して雑談をなすがごと」き問答体から来ていることはいうまでもない。

注17 工藤真由美「現代日本語のパーフェクトをめぐる」(言語学研究会編『ことばの科学 3』1989)。ただし本稿の〈完了〉には、工藤の言う〈現在パーフェクト〉だけでなく、〈(現在の)結果持続〉も含まれることになるので、完全には重ならない点がある。

注18 寺村秀夫「‘タ’の意味と機能——アスペクト・テンス・ムードの構文的な位置づけ——」(岩倉具実教授退職記念論文集出版後援会編『言語学と日本語問題』1971)。

(敬称略)

#### 付記

本稿は、平成2年国語学会秋季大会(高知大学)での口頭発表をまとめ直したものである。その席上、貴重な御意見・御質問をいただいた江口正弘氏、榎木久薫氏、大鹿薫久氏、金水敏氏に、厚くお礼申し上げたい。また筆者が大阪大学文学部に研究生として在学の間、懇切な御指導・御助言を賜った前田富祺教授、山口堯二教養部教授、高山善行氏に深く感謝する。

(ふくだ・よしいちろう 大阪星光学院中・高等学校教諭)